

野田の大花火と伝治さん（下野田町）

明治十一年八月、下野田町に生まれた橋本伝治さんは、花火が大好きで、こつこつと一人で花火の造り方を研究し、あぶない実験をくり返して、誰も真似のできないめずらし細工火（仕掛花火）を次々と発表して、人々をあつと驚かせました。小さな時から花火の大好きな伝治さんは、仲良しの牧野佐助さんと二人で、歩いて福井の大花火を見に行きました。二人は夜空に広がる花火を食い入るように見入っていました。

「おい、今の花火はじかなんだなー。」

「うん、はじかなんだ。」

はじかずに落ちてくる黒球に二人は気づき、その光を目で追って落ちた場所の目安をつけました。そして、花火が終ると暗い夜道を、また野田まで歩いて帰りました。

翌朝、目がさめると伝治さんと佐助さんは、昨日の黒球を拾いに行く用意をして、福井へ急ぎました。

「おい、たしか、ここらやったなあ。」

「うん、もう少しこつちやつたぞ。」

と昨日、目安をつけた場所を探し回りました。そして黒玉を見つけると大事そうに抱え、野田まで歩いて持って帰ると、早速、黒玉を慎重に分解して、花火の仕組みを調べました。そして、色々工夫を重ねながらそれとそっくりな黒球を造っては実験をしました。

パーン、パーンと花火の音がすると、村の人は

「今のは、伝治さんの花火の音やなー。」

と、あたりまえのように言っていました。

それから何年かのち、伝治さんはお嫁さんをもりました。

ある日のこと、仕事場でパーン、パンパーンと、はげしく火薬のはじく音がしました。

「おつ、こりやおおごつちゃ（大変）。」
と事を察した奥さんが二階へ駆け上がったを見ると、
伝治さんは大やけどで黒仏（全身真っ黒）のよう
になっていました。機転のきく、気丈な奥さんは、
急いで綿に種油をしみこませて伝治さんの全身を
包み、空気にふれないようにして荷車にのせ病院
へ駆けこみました。

奥さんの応急手当てがよかった
ので、一ヶ月ほどの入院でよく
なつた伝治さんは、また花火を造
り始めました。

このような危険にもめげず、花
火の研究を続け大正十年に花火屋
を開店しました。

伝治さん独自の花火は評判がよ
く、毎年八月二十四日の野田のお
寄り（日吉神社の夏祭り）には野
田の伝治さんの花火を見ようと大



勢の人が集まって来ました。豊村の人はもちろん
近くの町からも村からも盆踊りの着物や花笠をつ
けて、花火の打ち上げられるのを踊り続けて待ち
ました。

八月二十三日の日野山祭りで山から下りて来た
若い衆（若者）も、家に帰らず野田へ来て盆踊り

の輪の中に入り、大花火を見てまた夜明けまで踊り続け、それはもう大変なにぎわいでした。

日吉神社の境内も参道も、夜店がずらりと並んで大人も子供も楽しい一日を過ごしました。

また、毎年十月十五日の招魂祭に行われた鯖江の大花火は、西山公園の山の上で細工火の電車を走らせたり、ちようちゃんの中に仕掛けた花火に次々と火が入り、夜空に輝く富士山を浮かび上げらせたり、大音響とともに打ち上げられる花火に人々は歓声を上げ、光と音が繰広ですすばらしい世界に酔いしれていました。特に早打ちは大評判でした。

この早打ちは、頭から火の粉をかぶりながらの打ち上げで、とても危険なので伝治さんしか打ち上げることができませんでした。

早打ちとは、一つの筒の中に焼金を入れ、玉の下の口火の所に打ち上げ火薬を取付けた玉を一本一本入れて打ち上げる方法で、十本から十二本は

ど入れると筒が焼けて非常に危険なので、すぐに別の筒を使って手早く次々と打ち上げ、夜空に大輪の花を咲かせたのです。

十月十五日の鯖江の大花火は昭和十二年より戦時体制下で、昭和二十三年まで中止されました。

その間の昭和二〇年に、生涯、花火に情熱を傾け、人々に夢を与え続けた煙火師、橋本伝治さんは永眠されました。

伝治さん秘伝の花火の造り方は、一人息子さんを戦争で亡くされたので伝え残すことができませんでした。

しかし、その精神は、お孫さんに引き継がれ、鯖江の大花火で、今も、つつじ祭りのフィナーレを飾っています。